

続・梨壺における事業の再検討

熊谷直春

本誌前号において、『梨壺における事業の再検討』をしてみた。詳細は前稿を参照願いたい、その趣旨は次のようなものである。

従来、『源順集』の詞書や『本朝文粹』（巻第十二）所収の「侍中垂將爲撰和歌所別当。御筆宣旨奉行文」「禁制闕入撰和歌所一事」などの資料によって、天曆五年（九五）十月三十日、村上天皇の詔命により、後宮の梨壺（昭陽舎）に撰和歌所が設けられ、藤原伊尹が所の別当に、清原元輔・紀時文・大中臣能宣・源順・坂上望城の五人が召人に任命され、『万葉集』の訓釈と『後撰集』の撰集が行なわれたと言われてきた。

右の事項は、梨壺における事業についての定説であるが、それを導き出した解釈には誤りが多く、新しい解釈を加えてみると、右の三資料には、伊尹と梨壺の五人が『万葉集』の事業に携わった事実とは記載されているが、『後撰集』については何一つ触れられていないことがわかる。したがって、伊尹と梨壺の五人が『後

撰集』の撰者であったかどうか不明となり、定説の束縛から逃がれて、『後撰集』と家集を資料にして再検討してみると、撰者は、伊尹・平兼盛・壬生忠見の三人であった可能性がきわめて強いようである。

そこで、前稿の結果にもとづいて、両事業の、（一）奉詔と完成の時期、（二）作業者の人選、（三）契機と撰和歌所が梨壺に開設された理由などについて引続き再検討してみることにする。

二

最初に、両事業の（一）奉詔と完成の時期について述べてみる。

まず『万葉集』の事業の奉詔の時期であるが、『源順集』に、「天曆五年宣旨ありて、始めてやまと歌えらぶ所を梨壺におかせ給ひて、古万葉集よみときえらばしめ給ふなり。召しをかぶるは河内掾清原元輔、近江掾紀時文、讃岐掾大中臣能宣、学生源順、御書所の預坂上望城なり。藏人左近衛少将藤原伊尹その所の別当に定めさせ給ふに、神無月の晦日に御題を封じて下し給へり」と

あり、また、『本朝文粹』（巻第十二）所収の「侍中巫將為撰和歌所別當。御筆宣旨奉行文」に、藤原伊尹が撰和歌所の別當になつたのは、「天曆五年歲次辛亥。玄英初換之月。朱草將尽之時」（天曆五年十月三十日）であつたことが記されている。

従来、この資料によつて、『万葉集』と『後撰集』の両事業の奉詔の時期を天曆五年（九五二）十月三十日としていた。しかし、この時期は、『万葉集』の事業の方だけに關係するものであることは、前稿で論証したとおりである。また、天曆五年十月三十日というのは、資料をよく読むとわかるように、蔽密に言えば、伊尹が所の別當に、梨壺の五人が召人に任命された日付である。しかし、事業にあたる者が正式に詔命を賜わることを奉詔とすれば、人事発表の時に当然事業の目的が伝えられたであらうから、やはり右の日付を奉詔の時期とすべきである。

次に完成の時期であるが、それを直接伝える資料は何もない。ただし、天禄三年（九七二）「規子内親王前裁歌合」の判詞で、順が「そもそも順、むかし梨壺には平城の都の古歌よみときえらび奉りし時」と言っているから、天禄三年以前であることは確実である。しかし、「むかし」がいつの時であるのか、はっきりせず、この資料では具体的な完成の時期は出てこない。そこで注目されるのは、次の三資料である。

(一)『九曆』

(1) 天曆七年十月廿八日、殿上侍臣左右相分、各献²残菊三本。¹昨日欲¹献¹此花、而依¹有中宮御惱之氣停止。（中略）²左菊舊宿置作物所北廂」（是左方人彼所別當斎敏朝臣宿所）。右菊宿

置梨壺（是右方人藏人伊尹宿所也）。（中略）⁽³⁾洲浜長八尺広六尺許、以¹沈香¹作¹舟橋、以¹銀作¹鶴一雙、但一鶴食¹菊一枝、其葉書¹和歌一首。

(二)『統後撰集』（一三四三）

天曆七年十月后宮の御方に菊植ゑさせ給ひける日、上の男ども歌つかうまつりけるついでに

天曆御製

心して霜のおきける菊の花千世に変わぬ色とこそ見れ

(三)『村上天皇御記』

天曆八年正月四日。太后於¹昭陽舍藏。其後移¹住清涼殿北近廊。

右の三資料を用いて、『後撰集』の成立の時期を考えられたのが、山口博氏の「後撰和歌集の成立——梨壺を中心に——」（『王朝歌壇の研究 村上冷泉円融朝篇』（昭42・10））である。山口氏は、天曆七年（九五三）十月から翌八年（九五四）正月四日まで、梨壺が「内裏菊合」の菊の宿や中宮（太皇太后）藤原穩子の病室としてふさがっていたとして、天曆七年十月以前に、『後撰集』の事業が終了していたと考えられたのである。

これに對して、奥村恒哉氏は「成立年代考」（『古今集・後撰集の諸問題』昭46・2）で、『後撰集』の内部徴証からすれば、その成立は明らかに天曆九年（九五五）正月以後となるから（後掲）、山口説は内部徴証と矛盾し、成り立たないと反論されている。

三資料を『後撰集』の事業に關係づけて利用すれば、奥村氏の反論どおりになるが、『万葉集』の事業に關係づけられれば、矛盾も

おこらず問題はない。したがって、私は三資料を『万葉集』の事業の方に利用して、この事業が天曆七年十月頃に完成したと考えるのであるが、山口説には誤解があり、また奥村氏が「撰集の場を臨時に他に移したかもしれないし、又、太后が病床で梨壺がふさがっている間、作業を停止し、崩御後、又始められたとも、自然なこととして十分考え得る」と述べられているのは、対象を『後撰集』から『万葉集』の事業の方に切り換えても、気にかかるところである。そこで、三資料を再検討してみる。

山口氏は、(一)の傍線(2)から、「梨壺は十月廿八日には、菊の宿となりうる状態になっていた、すなわち撰集は終っていたと解されるのである」と述べられている。おそらく、梨壺が菊の宿となつたために、撰和歌所としての機能を終えていたと、理解されたのであろう。しかし、注意しなければならないのは、(2)によれば、十月二十八日まで梨壺が伊尹の宿所になっていることである。『職事補任』によれば、この頃、伊尹は五位藏人である。五位の藏人の宿所は、『西宮記』(巻八)の「宿所」の項に「藏人五位、在「同舍南面」とあるように、普通は校書殿の西にある藏人所の宿舎の南面にとるのである。それなのに、梨壺を宿所としているということは、彼が天曆五年十月以来、梨壺に置かれた撰和歌所の別当であつたからであらう。つまり、この日まで、梨壺は撰和歌所としての機能を果たしていたのである。

それでは、梨壺が菊の宿となつていたのに、撰和歌所として何をしていたのかということになるが、それは傍線(3)からわかる。作物所は洲浜の細工物を担当し、撰和歌所は和歌関係の準備をし

たのである。両所が菊の宿となつたのは、その縁なのである。

また、作物所の場合であるが、傍線(2)に「左菊暫宿置」とある。当日使用する菊をひとまず置くことを菊の宿と言つたようである。梨壺の場合も、そう何日間も置いたとは考えられず、仮に置いたとしても、事業の妨げになるほどのものではないだろう。

以上、述べてみたのは、梨壺が菊の宿になつたからと言って、撰和歌所が廃止されたわけでもなく、また事業を行なえない状態になつたわけでもないから、このことから事業の完成を論ずることはできないということなのである。

そこで注目したいのは、中宮藤原穩子の動向である。「近衛家文書」(『大日本史料』第一編之九所収)によれば、天曆七年正月三日から、穩子は弘徽殿を在所とされていたようである。その後、(二)によれば、「后宮」は中宮穩子、「御方」は梨壺であるから、穩子は同年十月に梨壺に遷御されている。遷御の日は、(一)からすれば、伊尹が梨壺を十月二十八日まで宿所としているから、二九日か三十日である。そして(三)によれば、翌八年正月四日まで梨壺を病室として、崩御されている。

穩子は、なぜ二十八日まで撰和歌所であつた梨壺に遷られたのであろうか。彼女くらしいの身分の高い女性の遷御となれば、清涼殿から遠くて格式の低い梨壺よりは、彼女の前の母后たち、藤原明子、藤原高子、班子女王が常御殿とされていた常寧殿もあれば、清涼殿に近い後涼殿などもある。ところが、(一)の傍線(1)によれば、穩子は二七日から病気がちなが、後宮の動向を考えてか、無理にそういう殿舎を空けさせることもなく、菊合の終わるのを待つ

て梨壺に遷っている。おそらく梨壺は撰和歌所が『万葉集』の事業をすでに終えており、菊の宿としての役割さえすれば、菊合後当分空く予定になっていたからに相違ない。

以上のように、梨壺が穂子の病室となった事情を考えれば、奥村氏の言われるように、無理に撰和歌所を他所に移したり、事業を中断したとは考えがたい。『万葉集』の事業は、天曆七年十月頃に終わっていたと見るのが妥当である。

次に、『後撰集』の事業の奉詔と完成の時期である。前稿で、撰者を伊尹・兼盛・忠見の三人としたので、両時期は、三人が揃って京にいる時である。

まず、奉詔の時期である。忠見に焦点を合わせると、『忠見集』に「前代の御時凡河内躬恒が候ひけむ例にてみづし所に候へと仰せごとありしを」とあり、また『三十六人歌仙伝』の忠見の経歴の項に、「天曆八年五月御記云。為御厨子所定外膳部。以壬生忠見（本名実字）。為定額膳部。天徳二年正月卅日任撰津大目」とある。前稿で述べたように、『忠見集』の詞書は、忠見が新たに任される『後撰集』の事業に従事するために、『古今集』の躬恒の前例にならって御厨子所への勤務を命じられた事実を伝えていると考えられるので、『三十六人歌仙伝』に見える任官の時、天曆八年五月を奉詔の時期と見たい。忠見は、その後天徳二年（九五八）正月三十日に撰津大目に任ぜられるまで、京官である。

伊尹の場合は、『公卿補任』を見るとわかるように、天曆八年の時、蔵人左近衛少将兼紀伊権介であって京官であり、その後

も生涯京官である。

兼盛の場合は、『三十六人歌仙伝』によれば、天曆四年（九五〇）に越前権守に任ぜられている。実際に任地に赴いたらしく、『元輔集』に、

つかさ召しのころすぎて雪の降りてはべりしに、兼盛がもにつかはしし

雪深み越の白山我なれやたが教へしに春を知るらむ

とある。普通国司の任期は、四年であるから、天曆八年には帰京していたのであろう。この年の春の除目は、三月十四日。『延喜式』（卷二四）に、「越前国 行程七日。下四日。海路六日」とあるから、交替者の下向、事務の引き次、上京の日数を多く見積もっても、四月下旬には京に戻って来ていると見てよい。その後、彼は天曆十年（九五六）の「麗景殿女御莊子女王歌合」や「斎宮女御徵子女王歌合」、天徳四年（九六〇）の「内裏歌合」などに参加し、同五年（九六一）に山城介に任ぜられるまで散官のまま京にいる。

以上、天曆八年五月の忠見に合わせて、伊尹と兼盛の動向を調べてみたが、この時期を奉詔の時期とするのに、何らさしつかえがないという結果が得られた。

この時期は、『万葉集』の事業を終えて半年余りである。すぐ『後撰集』の事業に移らなかったのは、人選ということもあろうが、最大の原因は、穂子が前述のように『万葉集』の事業完成後病氣となり、八年正月に崩御され、その後三月頃まで諸法会が続いたからであらう。勅撰集の事業どころではなかったのである。

『類聚符宣抄』(十)によれば、村上天皇は、この年の六月に、撰国史所の別当として新たに大江朝綱を任命して、『新国史』の事業にあたらせている。穩子関係の諸法会も終わって、一段落ついた頃であり、天皇が気分一新して、文化事業を促進されようとして決意された頃と思われ、『後撰集』の奉詔の時期としてよく適うのである。

『後撰集』の事業が、どこで行なわれたのか、よくわからない。村上天皇は、新たに撰和歌所を開設された方であるから、それを廃止することなく、同所で新事業に着手させたと見るのが自然である。ただし、場所は他に移したかもしれないが、梨壺は穩子崩御後しばらく使用されていなかったと思われるから、引続いて梨壺に置かれた可能性が強いと思う。所の別当も、引続き伊尹であらう。

『後撰集』の事業は、いつ完成したのであろうか。外部徴証による山口氏の梨壺の動向に合わせた決定法も、私の「秘閣における源順」(『和歌文学研究』昭47・6)の動向に合わせた決定法も、『万葉集』の事業の完成時期を考える場合には参考となるが、『後撰集』には適用できない結果となつてしまった。結局、集中の内部徴証によるしかないようである。

内部徴証による説としては、奥村恒哉氏の前掲「成立年代考」の説が最も有力である。奥村氏は、『八雲御抄』などが言う、四位以上には「朝臣」を付すという作者表記の原則に従つて、集中で「伊尹朝臣」(七一・九・七三二)と表記されていることから、伊尹が四位となった天曆九年正月以後、一方藤原元輔に「朝臣」が付

されていないことから(一〇九七)、元輔が四位となった天徳二年正月七日以前、この三年間に『後撰集』が成立したと考えられた。この期間には、前述のように、私の推す三人の撰者、伊尹・兼盛・忠見ともに京におり、内部徴証に照らしても合うのであるが、奥村氏の三年間をもう少し短縮してみる。

伊尹は、『職事補任』によれば、天曆九年八月九日に藏人頭になつてゐる。菊池京子氏の『所』の成立と展開」(『平安王朝』昭51・6)によれば、藏人頭の場合、所の別当を兼ねる場合、多くは兼所か作物所のようである。一方、伊尹の任官の八日後の十七日に、藤原朝成が藏人頭になって、二人藏人となっている。記録に残っていないが、通例に従つて両者が兼所か作物所の別当を兼ねたとすれば、伊尹は撰和歌所の別当職を離れたと思われる。別当が他の人物にかわつた可能性もないわけではないが、奥村説と合わせると、『後撰集』の完成の時期を天曆九年正月四日以後、同年八月九日以前と、七か月間に短縮できる。この時期は、村瀬敏夫氏の「後撰集撰述考」(『文学・語学』昭31・12)、萩谷朴氏の「三代集と初期歌合」(『鑑賞 日本古典文学 古今和歌集・後撰和歌集・拾遺和歌集』昭50・9)の説とはば一致する結果となる。右の期間を完成の時期とすれば、八年五月の奉詔の時期から数えると、短かければ九か月、長くとも一年半での完成となる。私は後者の一年半くらいの完成と見てゐるが、それでも短かすぎるという反論が出てこよう。しかし、逆から見れば、『後撰集』が多くくの点で杜撰だと指摘される問題の解決につながるのではなからうか。つまり、杜撰なのは、撰者の技量などではなくて、撰集

期間が短かったというやむをえない事情に主な原因があったのではなからうか。

なぜ、撰集期間が短かったのか。伊尹は天曆九年正月に従四位下になっている。四位になれば、四位の者の中から藏人頭が選ばれるから、伊尹はいずれ近いうちに藏人頭になることを予想したのであらう。藏人頭になれば、前述のとおり別の所の別当となる。自分の手で完成ということになれば、彼は作業を急いだであらうし、おそらく天曆九年正月から八月まで集中的に行なわれたのであらう。このような伊尹の事情で撰集期間が短かったと思われる。そういう意味で、完成の時期をぎりぎりの八月上旬と見たい。

以上の結果から、兩事業の奉詔と完成の時期をまとめてみると、次のようになる。『万葉集』の事業の方は、天曆五年十月三十日奉詔、同七年十月頃完成（作業期間二年）、『後撰集』の事業の方は、同八年五月奉詔、同九年八月上旬完成（作業期間一年半）である。従来の説のように、兩事業が並行して行なわれたわけでもなく、同じメンバーで行なわれたわけでもなくなったが、考えてみれば、それぞれ別の事業であるから、私説のような結果になるのが、当然のような気がする。⁽³⁾

三

次に、兩事業の（二）作業者の人選についてである。最初に、『万葉集』の作業者として、伊尹が所の別当に、元輔・時文・能宣・順・望城の梨壺の五人が寄人に、なぜ選ばれたのか述べてみる。

伊尹が所の別当となった理由について、前掲「奉行文」に「強

硬不撓。艶情相兼之臣」だからとある。また『大鏡』には、「ただ、御かたち、身の才の何事もあまりにすぐれさせたまへれば」とある。これらの表現には、誇張もあるだろうが、伊尹は仕事に忠実で、「艶情」（主として和歌の文情）もあり、「身の才」（主として漢詩文の才能）をはじめとして、何事にもすぐれていたという。撰和歌所の仕事には事務的なものもあり、『万葉集』には、和歌も漢文もあるから、事務能力、和漢の才共にある総合的な実力を持つ者として、伊尹は責任者に選ばれたのであらう。

次に梨壺の五人であるが、前稿で述べたように、前掲「禁制闢入撰和歌所」事」によれば、「尋箕裘」（父祖の遺業を継承する）ぬる者として選ばれている。元輔、時文、能宣、望城の四人は歌作りの（時文の場合は、万葉学もかねて）、順は万葉学の家業を継承する者としての入選である。しかし、五人の入選は、単に家業を継承する者としての資格だけではなく、当然本人の才能をも考慮してのことであらう。この点について、村瀬敏夫氏の「紀時文考」（『湘南文学』昭47・3）と芦田耕一氏の「坂上望城考」（『国文学研究ノート』昭52・7）を参照して言えば、元輔、能宣は歌才、時文は能筆、順は漢文学、望城は漢文学と事務能力ということになる。

しかし、入選ということになれば、現実にはかなり政治的な面が絡まってくるのが普通である。この点について、山口博氏の「専門歌人たち」（『王朝歌壇の研究 宇多醍醐朱雀朝編』昭48・11）と、前掲菊池京子、芦田耕一両氏の論文からヒントを得て言えば、六人ともすべて藏人所に關係する入選であったようである。

まず、彼等の勤務する撰和歌所であるが、「禁制文」が「蔵人少内記大江澄景」を通して出てくることからわかるように、蔵人所の管轄の所である。蔵人所の管轄の所ということになれば、所の別当には蔵人所の職員が補せられる場合が多いのであるから、五位蔵人伊尹が選ばれたのであろう。伊尹の場合は、伯父の左大臣実頼が蔵人所の別当であり、父の師輔は右大臣、妹の安子が天皇の女御であつたから、最初の撰和歌所の別当として、まず文句のない人選であつたと思われる。

次に、梨壺の五人である。元輔の場合は、『元輔集』に「蔵人所まかりはなれて後、梨壺にてをのことも雨ふる日さけたうべしついでに、友だちにあひてはべるよしを」という詞書がある。微官の元輔が梨壺にいたのは、梨壺＝撰和歌所に勤務していたからであり、「蔵人所まかりはなれて後」とあるから、その前は蔵人所に勤務していたのである。

時文の場合は、『九曆』（逸文）の天曆四年七月二三日の条に、「件箇今朝仰修理職令作進之、以內裏蔵（人）所紀時文令書之」とある。撰和歌所に勤務する一年ほど前に蔵人所に在る。能宣の場合は、『三十六人歌仙伝』に、「天曆五年正月任讃岐権掾（蔵人所勞）」とあり、天曆四年まで蔵人所に勤めている。

順の場合は、奉詔時学生である。一方、『本朝文粹』（巻第二）所収、順作の「夜行舍人鳥養有三歌」に「昔自天曆至康保。再直秘閣撰御書」とある。すでに前掲「秘閣における源順」で述べたように、「秘閣」は内御書所であり、天曆五年以前から、順は学生としてその所に勤務していたのである。この内御書所

は、御書所と共に蔵人所の管轄下にあつて、学生の勤務は、別当蔵人を通して決定される。

望城の場合は、奉詔時御書所の預である。御書所が蔵人所の管轄下にあることは、右に述べたとおりである。

このように、伊尹の梨壺の五人すべて、撰和歌所に勤める直前、蔵人所に勤めているか、あるいはその管轄の所に勤めている。『職事補任』によれば、伊尹は天曆二年（九四八）から五位蔵人である。彼は梨壺の五人のことは十分に知っており、寄人の人選は彼の推薦によるものと思われる。

次に、天曆八年五月から始まつた『後撰集』の撰者の人選である。これには、伊尹と兼盛、忠見の三人が選ばれている。

伊尹の場合は、前述のとおり所の別当としての資格を十分備えており、『万葉集』の事業の成功をふまえての引続きの人選である。また、彼には歌物語的家集「とよかげ」がある。次草で述べるように、『後撰集』の歌物語的特殊性が、後宮の女性たちの要望を汲まれた村上天皇の撰集方針の一つであつたとすれば、そういう意味でも伊尹の人選は、自然に選ばれたのであろう。

兼盛と忠見の場合は、どうであらうか。兼盛については、早くから藤原清輔が『袋草紙』で、「于時兼盛而不入此中、不審云々」と言っている。兼盛が当時の歌壇の第一人者であつたのにもかかわらず、撰者にならなかつたことへの疑問である。また、藤岡作太郎も『国文学全史 平安朝篇』（明38・10）で、「当時の名匠ときこえし兼盛、忠見の如きも、わづか一、二首に過ぎず」と述べ、兼盛、忠見を『後撰集』時代の代表的歌人と認めて

いる。それ以来、『後撰集』の撰者について触れる場合、この二人をさしおいて、なぜ梨壺の五人が撰者に選ばれたのか、疑問を投げかける人が多い。そういう意味からすれば、私論で二人を撰者に推すのは、決して暴論とは言えないように思われる。

しかし、問題は単純ではない。兼盛と忠見が当代の代表的歌人と言えるのは、天曆九年に『後撰集』が完成した後、同十年「麗景殿女御莊子女王歌合」や天徳四年「内裏歌合」にそろって参加したあたり、村上朝の後半からである。『後撰集』の事業が始まる天曆八年以前は、二人と梨壺の五人のうち歌才が認められていた元輔、能宣などは、ほとんど差はない。差がないと言うよりも、四人とも表だっては、ほとんど活躍していないと言った方がよい。村上朝に焦点を絞ってみても、能宣が天曆三年（九四五）に藤原忠平が没した時、追悼歌を詠み、元輔と忠見が天曆七年の「内裏菊合」に参加しているくらいのものである。兼盛の場合は、前述のように、天曆四年から同八年まで越前権守となって任地に赴いており、忠見の場合も、後に述べるように、「内裏菊合」まで摂津国に長らく籠居しており、京での表だった活躍が見られない。

以上の結果からすれば、天曆八年の『後撰集』の奉詔まで、兼盛と忠見が撰者に推されるほど、他の歌人に抜きん出た「名匠」だったとは言えない。むしろ、二人が奉詔の前まで京を離れていた分だけ、撰者として元輔や能宣より不利だとさえ感じられる。それが、どうして撰者に選ばれたのであろうか。

村上天皇即位の天慶九年（九四六）から、『後撰集』の事業奉

詔の一年前の天曆七年「内裏菊合」までは、和歌史にとって実に奇妙な時代である。歌合が行なわれたのは、天曆二年の「庚申陽成院一宮姫君歌合」一度だけであって、屏風歌の詠進もまったくない。醍醐天皇の時代に隆盛をきわめた歌合や屏風歌などの晴の歌は、朱雀天皇の時代になってしだいに衰退の兆しを見せはじめ、天慶九年の紀貫之の死をもって終わりを告げたかのようなのである。

それでは、右の時代は、和歌史にとっていかなる時代であるかと言えは、歌語りの時代である。天曆五年原形成立の『大和物語』に、多くの歌語りが載せられており、それらが人々の口端に上ったということは、それまでは歌語りのただならぬ時代であり、まさしく和歌史が晴の歌から衰の歌の時代へと移向した時代なのである。

このように、『後撰集』の事業奉詔前史を把握した上で、撰者の一人兼盛を考えてみると、高橋正治氏の「宇多法皇をめぐる社交圈」（『大和物語』昭37・10）によれば、『大和物語』には、兼盛の歌は八首入っていて、監命婦、とし子と共に最も多いという。兼盛は生存人物でありながら、『後撰集』の奉詔以前において、最も話題の多い、人気のある歌人だったのである。言葉をかえて言えば、歌語り隆盛時代において、第一の歌人だったと言えるのである。

こうした兼盛に対して、伊尹と梨壺の五人、忠見などは、一度も『大和物語』に登場しない。伊尹は歌物語的人物で登場してもよさそうなのであるが、登場しないのは、『大和物語』の作者に擬せられている大和が彼の乳母であったから、幼い時から大和

が語った歌語りを基本にして、伊尹がこの物語を集大成したからであろう。この伊尹が、撰和歌所の別当として、歌物語的歌集を一つの特色とする『後撰集』を責任編集するにあたって、歌語り時代第一の歌人兼盛を撰者の一人に選ぶのは、当然のことであつたと思われる。

次に、忠見の場合である。忠見は兼盛とちがって、歌語りの中の有名歌人ではない。それに、前稿でも述べたように、きわめつきの凡卑として知られている。そういう彼がなぜ撰者に選ばれたのであろうか。

忠見には、不思議に天皇との関係がつきまとう。忠見が幼少の時、醍醐天皇から竹馬に乗って参内するようと言われた逸話が、『袋草紙』に伝えられており、また朱雀天皇との場合も、『忠見集』（西本願寺本）に「朱雀院の御屏風に」、「『統後撰集』（一二五七）に「朱雀院かくれさせ給ひける時彼の御送りに参りて読み侍りける」などあって、天皇在位中からの深い関係が偲ばれる。

村上天皇との場合は特別であつて、前稿で述べたように、御厨子所に勤務させて撰者の一人に任命している。また、『忠見集』には、「津の国に年頃身を沈めて籠り居たるを、その先の帝聞しめしあげさせ給ひてけり（下略）」という詞書をもつ天皇との贈答歌がある。この詞書の場面を、清輔は『袋草紙』で天徳四年「内裏歌合」の際、忠見が天皇から召し上げられた時とする。おそらく、彼が天徳二年に摂津大目に任ぜられているからであろう。しかし、二年間では「年頃」に合わない。また、天暦十年の「麗景殿女御莊子女王歌合」、「斎宮女御薺子女王歌合」の場合も、前述

のように同八年五月から御厨子所に勤務して京にいたので、詞書の内容に合わない。結局、天暦七年十月「内裏菊合」に召し上げられた折のことであろう。前述朱雀院の葬送への参加は、天皇崩御の天暦六年（九五二）の時であるが、参加のため摂津国から上京はしたものの、直接村上天皇には会わなかったと見る。

『忠見集』では、この詞書をもつ歌と前掲「前代の御時凡河内躬恒が候ひけむ例にてみづし所に候へと仰せごとありしを」という詞書をもつ歌とが連続する。おそらく村上天皇は、早くから『後撰集』の事業のことが心にあられ、摂津国に籠居している忠見を菊合に参加させ、引続き御厨子所に勤務させて、『後撰集』の事業に従事させようとする意図を持たれていたのではあるまいか。

忠見が、三代の天皇に可愛がられた理由は、よくわからない。おそらく、父忠岑の縁からではないかと想像されるだけである。いづれにせよ、前代から引続いての村上天皇と忠見との関係は、きわめて密接で、他の歌人にはそのような事跡はない。忠見が撰者になったのは、天皇との特別の関係と言えそうである。

ところで、『後撰集』には、歌物語的特色の他に、『古今集』時代の歌人が重んぜられていること、当代では権門の人々の歌や女性性の歌が多いという特色もある。『古今集』の撰者忠岑を父に持ち、古今風の歌を詠む忠見は、『古今集』時代の歌の収集、選歌などの面で最適任の歌人だったのであろう。ついでに言えば、兼盛は歌語り方面の、伊尹は『大和物語』の他に、妹安子を通して後宮の歌語り（特に女性歌）、それに権門の人々の歌の収集と選

歌に主としてあたったのではなからうか。そう見ると、『後撰集』の特色と三人の人選と、うまく合致することになる。

四

最後に、両事業の(三)契機と撰和歌所が梨壺に開設された理由について述べてみたい。

両事業の契機については、藤岡忠美氏の「後撰集の構造——その三、梨壺、その女性的契機——」(『平安和歌史論——三代集時代の基調——』昭41・2)が有名である。藤岡氏はこの論文の中で、藤原師輔の娘で村上天皇の女御である安子の住んでいた梨壺が撰和歌所として開放され、長男伊尹の宿所となり、さらに叔母穩子の病室となったことに注目されて、『万葉集』が女性にも読めるという訓釈の女性化と、『後撰集』における恋歌の氾濫現象、女流歌の増加、歌物語の傾向、生活性日常性への傾斜などの新しい特色は、師輔Ⅱ伊尹Ⅱ安子という政治権力を背景とし、そのような性格を持つ事業を希望する後宮の要請(女性的契機)が、安子を通して実現されたものであることを論じられている。

私は、藤岡氏の言われる女性的契機が、両事業開始のために働いたことは、十分認めたい。よく論じられるように、村上天皇の後宮には、妍を競うばかりの才媛が多く集まっていたから、彼女たちの女性的な文化事業を希望する意志が、安子を通して村上天皇に少なからぬ影響を与えたことは、十分考えられることだからである。しかし、私は、撰和歌所の梨壺への開設を師輔一門の権力や女性的契機に結びつけることには疑問を持つし、それに両事

業が天皇の詔命による国家的事業であることを思えば、村上天皇自身の契機も考えなければならないように思うのである。

まず撰和歌所が後宮の梨壺に開設された理由であるが、これは当時の和歌観にもついたのである。

前勅撰集の『古今集』の撰集の場所は、『貫之集』に「承香殿の東なるところに撰ばしめたまふ」とあるように、承香殿の東片廂に設けられている。そこは、具体的には天皇の御文庫、内御書所だと言われて後宮の梨壺に撰和歌所を設けた『後撰集』と対比して、両集の特質を比較して論ずる人が多かった。しかし、山口博氏が「古今集の形成」(前掲『王朝歌壇の研究 宇多醍醐朱雀朝篇』)で立証されたように、承香殿の東片廂に初めから内御書所があったのではなく、撰集の場が『古今集』完成後内御書所になったのである。そうすれば、承香殿も後宮十二殿舎の一つであるから、『後撰集』の梨壺Ⅱ撰和歌所と同じことになる。そこで問題になるのは、『古今集』、『後撰集』時代において、和歌関係の事業の場所を、なぜ後宮に設けなければならなかったかということである。

この問題の解決のヒントになるのは、歌合が行なわれた場所であって、萩谷朴氏の『平安朝歌合大成 第一・二巻』(昭32・1、33・1)でもって最初に行なわれた仁和元年(八八五)〜三年(八八七)の「民部卿行平歌合」から天徳四年「内裏歌合」まで、五五回の歌合を通覧してみると、興味深い事実が見つかる。これらの歌合の中で、「内裏」という名が冠せられているのは、実際には『拾遺集』時代に行なわれた(萩谷説)延長八年(九三〇)以

前「内裏歌合」を除けば、仁和四年（八八八）～寛平三年（八九一）「内裏菊合」、延喜十三年（九一三）「内裏菊合」、天曆七年「内裏菊合」、同九年「内裏紅葉合」、同十一年（九五七）以前「内裏前裁合」そして天徳四年「内裏歌合」である。天徳四年「内裏歌合」以前において、内裏（この場合具体的には清涼殿）で行なわれた歌合には、和歌が中心となる純粹な歌合は一つもなく、和歌が添え物となる物合ばかりなのである。

それに対して、内裏で行なわれた純粹な歌合の場合は、寛平五年（八九三）九月以前「皇太夫人班子女王歌合」、同八年（八九六）六月以前「后宫胤子歌合」、延喜十九年（九一九）「藤壺女御歌合」、天曆十年「麗景殿女御莊子女王歌合」・「斎宮女御微子女王歌合」、天徳二年七月以前「中宮歌合」、同三年（九五九）「庚申中宮女房歌合」などと、後宮の女性名が冠せられ、同じ内裏でも後宮で行なわれたと思われるものである。

どうして、純粹な歌合が清涼殿で行なわれず、後宮で行なわれなければならなかったのか。おそらく前稿で述べたように、和歌は「艶辞」であって女性のものであり、公式には士大夫の前に出せなかったからであろう。このような和歌観が、『古今集』から『後撰集』成立の頃までであったのであり、『後撰集』の撰和歌所は、『古今集』の伝統を受けて後宮の梨壺に開設されたものと思われる。

また、後宮の殿舎の中から梨壺が選ばれたのは、大して意味がないと思う。撰和歌所は、確にかつて安子が在所としていた梨壺に設けられはしたが、伊尹はその所の別当になったから宿所と

したのであり、穩子の場合も、前述のように後宮の動向に合わせで遷御されたにすぎない。結局、目崎徳衛氏が「三代集の時代」（前掲『鑑賞 日本古典文学 古今和歌集・後撰和歌集・拾遺和歌集』）で述べておられるように、たまたま梨壺が空いていたから選ばれたのであって、撰和歌所が梨壺に開設されたことを、兩事業の女性的契機や師輔一門の権力に結びつけて意味をもたせて考えるのは、妥当な見解とは認めがたいのである。

村上天皇が、国家的事業として兩事業を行なわれる契機となつたものは、杉谷寿郎氏も「後撰集の撰集——村上天皇と後宮——」（『文学・語学』昭35・9）で述べておられるように、天皇が理想の天皇と仰ぐ父帝醍醐天皇が文化事業に力を入れられ、それを継承されようとしたからであろう。

私論では、焦点を兩事業関係に絞ってみる。村上天皇は、醍醐天皇の先例を最も重んじられた方であるが、『村上天皇御記』天曆四年十二月三日の条によれば、御仏名後の竟宴で、延喜の例にならって和歌の行事を催されており、また前掲天曆七年「内裏菊合」も先例にならわれたらしく、『九曆』に「仰云、去延喜十三年、侍臣献菊」という天皇のお言葉が記されている。このように、醍醐天皇の先例にならって和歌の行事を催すようになれば、同じように和歌の事業をおこそうとされるのは、当然の事のならゆきである。

『後撰集』の場合も、醍醐天皇の先例になつたものであることは、忠見が前代の躬恒の先例にならって御厨子所に勤務し、また、撰和歌所を後宮に開設したことからわかるが、『後撰集』と

いう歌集名にもよくあらわれている。『榮花物語』（月の宴）に、「此の御時には、その古今に入らぬ歌を、昔のもの今のも撰ぜさせ給ひて、後に撰ずとて後撰集といふ名をつけさせ給ひて、又廿巻撰ばさせ給へるぞかし」とあるように、『後撰集』には『古今集』の統集の意味がこめられている（『新国史』が別名「統三代実録」とも呼ばれ、『日本三代実録』にならっているのも同例である）。

次に、『万葉集』の事業の方であるが、『河海抄』（巻十三）所引の藤原穩子の日記『太后御記』承平四年（九三四）十二月九日の条に、「せんだいの御でのまむようしう、今一には本五まき、やまとこと一云々」とあるように、醍醐天皇宸筆の『万葉集』十卷（一箱に五巻ずつ二箱）あったという。十巻本『万葉集』ということになれば、これは『万葉集』の抄本であったことが知られ、醍醐天皇の御代にも何らかの『万葉集』の修撰があったものと推定される。この『万葉集』抄のことは、もとより村上天皇はご存知であつたらう。梨壺の五人は「尋眞衰」ぬる者として、『万葉集』の事業にあつたが、父祖の遺業の継承とは、村上天皇自身にも言えることだったのであるまいか。

以上述べたように、村上天皇が両事業をおこされた契機は、醍醐天皇の文化事業を継承されたところにあつたと思われるが、単なる亜流でなかつたことは確かである。『万葉集』の方では、修撰を抄本にとどめず全巻の修撰と訓釈を目ざしている。『後撰集』の場合も、『古今集』的典型にならわず、その時代の和歌史のあり方をよく反映させて、歌物語的性格を一つの特色とし、また男性高官や女性の歌を多くして、士大夫に和歌の重要性を認識させ、

和歌の作者や享受者の多い女性層を尊重している結果となり、この勅撰事業を契機として、和歌の隆盛を促そうとする意気込みが十分感じられるのである。

注（1）『大日本史料』（第一編之十）の比定による。

（2）拙稿「新撰万葉集の成立」（下）（『国文学研究』昭52・3）で詳述。

（3）『万葉集』の事業が後になつたための、『後撰集』と万葉集の關係については、別稿に譲る。

（4）『後拾遺集』（9）に「天曆三年太政大臣の七十賀し侍りける屏風によめる」という詞書をもつ大中臣能宣の一首がある。実際には天禄三年（九七〇）藤原実頼七十賀の時の作であることは、佐藤高明氏が「後撰和歌集撰者の作歌技術に關する批判的考察」（『後撰和歌集の研究』昭45・2）で考証されている。

（5）『和歌文学大辞典』の和歌史年表では、天曆四年（九五〇）の項に、『夫木抄』（巻二〇）から、「式部卿敦実親王家歌合（イ 庚申一品官歌合）」を載せている。しかし、萩谷朴氏は、『平安朝歌合大成 第三巻』（昭34・4）で、この歌合は、実際には、長久元年（一〇四〇）正月五日庚申「一品官修子内親王歌合」であることを考証されている。萩谷説に従う。また、注（4）参照。

（6）『九曆』天曆四年五月二四日の条に、「少将伊尹之乳母大和」と出ている。